

<日本灯台紀行 旅日誌>

第 13 次灯台旅 清水編

2022 年 9 月 24.25 日

目次

#1 プロローグ

新型ベゼル購入

#2 一日目 2022-9-24(土)

清水港三保防波堤北灯台撮影 1

#3 一日目 2022-9-24(土)

清水港三保防波堤北灯台撮影 2

#4 一日目 2022-9-24(土)

清水港三保防波堤北灯台撮影 3、真崎海岸車中泊

#5 二日目 2022-9-25(日)

清水港三保防波堤北灯台撮影 4、帰路

#1 プロローグ 新型ベゼル購入

衝動買いである。車を点検に出した際、なじみの営業マンが、六年半乗った初代ベゼルを、今なら 100 万で下取りしますよ、と言ってきた。半導体関連の問題で、中古車が値上がり中で、今後のことを考えても、今買え替える方が絶対お得ですよ。たとえばですね、と営業マンは、さらに、たたみかけてきた。今のお車をあと七年乗って、乗りつぶした後は、軽に乗り換えますか？

七年たったら、自分は 77 歳だ。元気ならば、車は必要だろう。だが、年を取ったからといって、今よりも小さな車に乗り換えるのは、なんとなく抵抗がある。事故の際にも、大きな車の方が安全だろ、と自分に、見栄っ張りの言い訳をしている。営業マンは、そこを突いてきたのだ。

とにかく、今乗っている車を、乗りつぶすにせよ、買え替えるに

せよ、八十五歳まで、車に乗るつもりであるならば、もう一台、人生最後の車が必要となるわけで、その車を、あと七年後に買うか、今買うか、という選択に迫られた。

いや、迫られているわけではないのだが、今のお車に特別の愛着があるのなら別ですが、いずれ、買え替えるのなら、今がお得ですよ、と悪魔がささやくのだ。いつもなら、そんな声には耳を傾けない。というのは、車は新車で買って、15年くらい乗って、乗りつぶすのが、一番経済的だと思っているからで、今の車だって、そのために大切にされていて、ドアの裏側までぴかぴかなのだ。

だが、今回は、＜間＞が悪かった。というのも、つい最近、新型ベゼルが走っているのを見て、カッコいいな、と思ってしまったのだ。それに、自分と同じ形の車が、よく走っていて、それを見るたびに、いささかうんざりしていたところだった。しかも、新型ベゼルの中で一番安い、ガソリン車の白が、二週間後に納車できるというのだ。ちなみに、二代目ベゼルの納車は、いろいろな理由で、普通なら、半年先だそうなの。

今思えば、ためしにと、見積もりを取らせたのが、間違いだった。総額で275万。下取りが100万で、支払金は175万。ま〜、い

ずれ、出さねばならないカネで、それを、七年後に出すか、今出すかの違いだ。いや、七年後だったら、軽しか買えない。軽だと、もう遠出はできなぞ、と悪魔がまたささやいた。

人生最後の車、か。ちえ！結局、所長決裁で支払金を 160 万にしてもらって、即決してしまった。実際に、車を見てもいないというのに、なんということだ！！！！

その夜、あれこれと計算していた。要するに、今の車をあと七年ほど乗って、乗りつぶした場合と、今ここで買え替えた場合との差額だ。30 万ほどの損失だった。ただし、これには条件がある。新しく買った車を 15 年以上乗った場合に限られる。15 年！自分は 85 歳だ。車どころではない、生きていないかもしれない。

心の底では後悔していた。今なら、キャンセルできるかもしれない。なにしろ、正式なハンコはついていないのだ。娘に相談したら、止められた、とかなんとか言い訳して、明日断りの電話を入れようか。いや、支払金 160 万なら買う、と言ったのだ。前言を翻すことは自分のプライドが許さない。

遠出できるのは、あと、せいぜい10年だろう。30 万の損失で、

その最後の 10 年の遠出を、新車で乗り切れるということだ。それに、ナビも新しいし、車内 Wi-Fi もついている。車中泊で PC が使えるのは、至極便利だ。取り返しのつかないことに対して、自己正当化している。衝動買いで、老後の生活資金を浪費したことを、実は悔いているのだ。

その後、何日かして、正式な注文書に判を押した。これで完全に、あと戻りはできない。にもかかわらず、気分的には、スッキリしない。ぐじぐじと思い悩んでいた。だが、納車日の連絡が来て、今乗っている車から、私物類をすべて出した時、要するに、もう自分の車ではなくなったことが、はっきりと眼に見える形になった時、気持ちが吹っ切れた。

面倒なワックスがけをしてきた、愛着のある車だ。思い出のたくさんつまった車だ。だが、からっぽになった車内を見た時、思い出は車にではなく、自分の心の中にある、と直感した。〈ご苦労さん〉〈ありがとう〉。六年半乗った車に声をかけた。正直な気持ちだった。最後に、なじみの植物園の駐車場で、記念写真を何枚も撮った。

納車の日、晴れた。すでに、初代ベセルは、過去のものとな

り、まさに人生最後の車、二代目ベゼルが目の前に止っていた。ひと通りの説明を受け、納車手続きを済ませた。とりあえずは、すぐに自宅に戻った。というのも、計器類の見方や、運転の操作手順、さらには、ナビの使い方、見方などを、説明書を見ながら、じっくりゆっくり、楽しみながら頭の中に入れたかったのだ。

ひと通り理解した後で、おやっと思った。ドアミラーが自動で開閉しないのだ。前の車には標準装備だったのにと、カタログをよくよく見ると、あろうことか、オプション仕様になっている。なるほどな、この件に限らず、今回の車は、グレードが前の車より少しおちる感じで、内装も、心なしか、ちゃっちい。ただし、ここまでは、許容範囲だった。なにしろ、ナビがいいのだし、車のデザインも気に入っている。ところがだ、オーディオの音が、前の車に比べて、かなり落ちる、ということを理解したときには、さすがにガックリきた。

ドアミラーは手動でも用は足りるし、内装にしたところで、じきに慣れるだろう。たが、音に関しては、ま、ジャズ愛好家の旧友の影響だが、生意気にも、その良し悪しが、多少なりとも感じ取れるようになっている。いきおい、出来るだけいい音で音楽を

楽しみたい、と思うのは人情だろう。もっとも、事前に、このことがわかっていたら、オプションでいいスピーカーに変更したかといえば、自分の性格からして、おそらく変更しないだろう。車の中だけだ。ここは、ぐっと堪えて、諦めるしかない。

おりしも、台風が次から次へと日本列島に上陸してきて、この時期にしては、実に晴れ間が少ない。その間、近場を走り回って、車の調子をみたり、ナビに従って運転したり、それから、なぜか、というか新車なのに、タイヤの縁が汚れているので、タワシできれいにしたり、後部座席を倒して、車内での車中泊の予行演習をしたりした。

そうだ、本来ならば、九月か、遅くとも十月上旬までに、車で北海道・根室付近に、撮影旅行に行くつもりだったのだ。うっかり、この話を担当セールスにもらしたら、すぐにではなく、車に慣れてからの方がいいですよ、とやんわりクギを刺された。たしかに、車格はほぼ同じだが、計器類や運転操作は、多少変更されている。自分としても、不慣れな新車で、即、フェリーに乗って、北海道、というわけにもいかないなと思った。

となると、念願の北海道は、来年の九月まで持ち越しということか。すでに、ほぼすべての計画を立て終え、車中泊の場所も、

グーグルマップで確認済みなのに。ちなみに、九月は、根室地方で晴れ間が一番多い季節である。それなら、十月中旬頃、能登旅へ行こうか。こちらも、すでに計画を立て終わり、いつでも行ける状態になっている。ただいきなり、長距離での高速運転、しかも長期間の車中泊、というのも考えものだ。

で、ここでぱっとひらめいた。そうだ、富士山に見える灯台へ行こう。じつは、一代目のベゼルを買った直後の、2016年4月に、静岡県の灯台を見て回ったのだ。その中に、おそらく日本で唯一だろう、富士山がバックにある、清水港三保防波堤北灯台へも行ったのだ。あの時は、軽のジムニーからの乗り換えで、まだベゼルにも慣れていなかった。運転にかなり気を使い、疲れた。もっとも、車中泊ではなく、たしか、ビジネスホテルに四泊くらいしたのだと思う。

とにかく、静岡なら、片道200キロくらいだし、件の防波堤灯台の海岸沿いは釣り場だから、夜中でも車が止まっているだろう。そうならば、車中泊も怖くはない。高速走行と車中泊の予行演習、それに、富士山に見える灯台の風景が撮れる。一石二鳥とはこのことだ。さらにさらに、土曜に出て日曜に帰ってくれば、高速料金も、往復、休日割りになる。

とはいえ、人生は、と言うべきか、世の中は、と言うべきか、物事はこちらの思う通りには進まない。先ほども書いたが、今年の九月は、台風が週末ごとに来て、なかなか晴れ間が続かない。しかもだ、あろうことか、予定していた土日に、大型台風が、静岡県を直撃だ。あ～あとと思いながら、天気予報を注視していた。と、土曜日に台風は関東に抜け、日曜は文字通り、台風一過の晴れ、月曜日にも晴れマークがついている。ここはもう、高速の休日割引とか言ってもらえないでしょ。新しい車で、遠出したくてたまらなかつたのだ。

#2 一日目 2022-9-25(日)

清水港三保防波堤北灯台撮影 1

当日は朝五時に起きて、六時過ぎには出発した。二代目ベゼルでの高速走行は今日が初めてだ。気持ち的には、すこし抑えて走ろうかなと思っていたが、いったん高速に乗ってしまえば、車の流れというものがあり、たらたら走るわけにはいかない。すぐに100キロくらい出てしまった。走行安定性も静粛性も、一代目ベゼルよりはすぐれていると感じた。

あと問題になるのは、120 キロ以上出した時の感じだが、これは、<新東名>に入って試してみた。<新東名>は、おそらく日本ではじめて、普通車最高速度を 120 キロにした高速道路だ。120 キロ出したとしても、違反にはならない。とはいえ、スピードは苦手だ。そんなに速く走らなくてもいいではないか。で、二代目ベゼルの 120 キロ前後の感じだが、これは、一代目と大差ないような気がした。車格としても、このクラスの車の限界なのだろう。だが、問題はない。120 キロというスピードは、追いつく時に、瞬間的に出すだけだ。

さてと、いつものように、一時間おきくらいにトイレ休憩をした。西に向かう時には、<圏央厚木>次に<駿河湾沼津>がお決まりになっている。どちらのパーキングにも、朝っぱら、人がいっぱいいて、行楽気分で盛り上がっていた。<コロナ>なんか関係ない！俺だって、晴れた休日を、たまには楽しみたいのだ。

<沼津>から<清水>までは、あっという間だった。高速を下りて、清水区の市街地を抜け、<三保の松原>方面へ向かった。自分にとって、<清水>は、<次郎長>と<ちびまる子ちゃん>の町だが、実際には、漁業関連のかなり大きな街だっ

た。

<三保の松原>に、ちょこっと寄って行こうと思って、事前にナビに指示していた。だが、なにやら、前回来た時とは、違った道を案内されているようで、しかも、しだいに道端も狭くなる。不安になって、大通りにあっさり戻った。<三保の松原>は、ま、パスだな。

道路際にファミマの看板が見えたので、ハンドルを左に切った。多少便意をもよoshたのだ。しかしながら、入口に、断水でトイレは使えません、との張り紙があった。この時はピンと来なかったが、午後にもう一度、海岸に近い方のファミマに寄った時にも、同じような張り紙があった。その時には合点した。この日、台風の影響で、清水区は広範囲で断水していたのだ。よりによって、日本でただ一か所？断水している地域へ、わざわざ乗り込んできたわけだ。ま、これもなにかの<めぐりあわせ>だろう。

信号機についている交差点名が、眼の上の方でちらっと見えた。たしか<三保の松原>とあった。瞬間的に右を見ると、見覚えのある道路だ。あの道だったなと思った。だが、すでに気持ちはさめていて、引き返す気にはなれなかった。

さらに大通りを進んでいくと、観光客用の有料駐車場やら、博物館やら土産物屋やらが見えた。ちらほら人の姿も見える。ああ、思い出した。一見して行き止まりに見えるが、実は右折できて、そのまま行けば、海岸沿いの広い駐車スペースに出られるのだ。

有料駐車場の誘導員を横目に見て、砂利道の松林の中に入って行った。すぐに二股になる。方向から言って、左でしょう。車一台やっと通れる悪路だ。今度は右にハンドルを切って、藪の中に入る感じで、斜めに土手を登る。と視界が開けた。海岸沿いの細長い駐車スペースで、縦に、二列に車が止められるくらい広い。海に向かって、車がかなり止まっていた。

来たことがある筈だが、記憶が全く蘇ってこない。そんなことはどうでもいい。目の前の富士山を見た。青空の中、上の方にくろっぽい三角形が見えた。おそらく八合目あたりだろう。その下は、もくもくの雲でおおわれている。灯台はといえば、海の中の防波堤の先にちょこんと立っている。構図としては、左上に富士、右下に灯台で決まりだろう。ただ、灯台とカブるように、沖合に大きなコンテナ船が止まっている。動く気配はない。邪魔だよなあ～～。

とりあえずは、下見方々、カメラを二台、それぞれ斜め掛け、肩掛けして、海岸に下りた。駐車場からは、タイル張りの段々があり、その先が少し砂浜になっている。波打ち際には、ところどころ、ゴミや流木が堆積していた。これは台風の影響だろう。日差しが強くて、強風だったが、目の前が開けていて、心地よかった。

木の根っこなどの堆積物前で、富士山と海と灯台とへ向かって、写真を撮っていた。と、左の方で、黄色いポロシャツの爺が、堆積物を杖のようなものでかき回している。左手が不自由なようで、指が歪曲している。平たい、真っ赤なガソリンの携行缶を見つけたらしく、手前に引き寄せている。蓋を開けたのだろうか、心なしガソリンの臭いがする。

シカとして、撮り続けていると、近寄ってきた。沖合に停泊しているコンテナ船を眼で示して、いつまで泊まっているんだろうな、邪魔だよ、と話しかけてきた。邪魔？ひょっとしたら、この爺さんは、元気なころに写真を撮っていたのかもしれない。沖合のコンテナ船が邪魔だと思うのは、この位置から富士山を撮っているカメラマンしかいないだろう。適当にあいずちを打って、そのあと、二、三言、言葉を交わした。爺さんは、こちらの雰囲気

気を察してか、拾い上げた真っ赤な携行缶を、大事そうに抱えて、すぐに離れていった。あんなものをどうするのだろう。すこし足を引きずっているようにも見えた。

炎天下での、久しぶりの写真撮影で疲れた。小一時間ほどで、駐車場にもどった。強い日差しで、暑い。車の中で、ひと寝入りしたい。とはいえ、カンカン照りの中では無理でしょ。日陰になっている端の方へ車を移動した。ふと思いついて、車のドアガラスに、黒いメッシュの虫よけカバーをかけた。こうすれば、蚊の心配なく、窓を少し開けたままで休むことができる。

後ろのドアから、車の中に滑り込んだ。一代目ベゼルの時は、運転席から、フラットにした仮眠スペースへ、運転席と助手席のシートの間をすりぬけて移動したこともある。だが、狭いので、体を無理に折り曲げる必要がある。二代目ベゼルは、その幅がやや広くはなっている。だが、窮屈な態勢で移動することには変わらない。考えただけでも、しんどいので、いまだに一度も試していない。老化が確実に進んでいるわけだ。もともと、後ろのドアから、比較的すんなり入れるので、その必要もないだろう。

エアコンをつけっぱなしにして、日除けシェードも耳栓もしない

で、横になった。かなり疲れていた。ひと寝入りして午後の撮影に備えよう。肘枕して、目をつぶった。車のアイドリング音が少し気になったものの、体感的にはさほど暑くはない。静寂はすぐに訪れた。そして、ほどなく、うとうとしている自分に気づいて、目がさめた。ほんの一瞬だったような気がする。だが、頭が軽くなっていて、元気になったように感じた。ちょっとでも、うとうとできれば、疲れは取れるものだ。してやっつかりの持論で、気分もよくなった。

#3 一日目 2022-9-25(日)

清水港三保防波堤北灯台撮影 2

一時間ほどたって、十二時過ぎになっていた。依然として快晴。日差しが強くて暑い。さてと、午後の撮影だ。今度は、カメラ二台に、三脚も持った。どのみち、距離がありすぎるので、望遠での撮影がメインだ。ということは、カンカン照りの波打ち際に行かなくとも、少し離れるが、一段と高くなっている駐車スペースからでもいい。

風景に対して、なんというか、左右移動ではなくて、前後移動だから、写真の構図は、さほど変わらない。いや、厳密にいえ

ば、同じ構図の風景でも、望遠になるほど、圧縮度があるから、見た目は変わってくる。しかし、いまの場合、画角差が小さいから、その差異は問題にならないだろう。被写体にできうる限り近づく、という撮影流儀を、小理屈を並べてあっさり反故にして、これは横着ではない、と開き直った。

ほぼベストポジション、手持ちで、重い望遠カメラで撮った。しかし、こことて炎天下、すぐに暑くなってきた。駐車スペースが切れたところ、背後に木々が生い茂っていて、砂浜に続く段々が少しだけ日陰になっている。のろのろと移動して、よっこらしよと腰かけた。自然と溜め息が出た。一息ついて、三脚に望遠カメラを装着した。少し右に移動したのだから、構図的には、灯台と防波堤が、やや中央に移動する。ま、これも、考えようによっては、いい構図だ。それにしても、ここ数年で、撮影体力が極端に衰えてしまったようだ。

段々に腰かけて、しばらくは、楽な態勢で写真を撮っていた。依然として、富士山の八合目より下は、巨大な雲海に覆われたままなので、雲の上の青空に、黒っぽい三角の富士が突き出ている光景に変化はない。少し休憩して元気が回復したので、立ち上がり、日陰の下で、今度は、手持ちで撮り始めた。

すると、横から、貧相な小男が声をかけてきた。すごいカメラですね～、何ミリくらいあるんですか？これは、400mmですけど、重くてね。自分も、昔、写真やってて、フィルムの時代に、300mm のをもってまして、いや～いいですね～。風体はホームレス仕様だが、笑顔がいい。二、三分立ち話をした。

おそらくは、自分と同年配だろう、小男は、胸のポケットから、タバコを取り出して、ごめんねと言って、火をつけた。そのあとも、こちらのカメラをさりげなく見て、何回も、いいですね～とつぶやいた。これはあきらかに、往年の自分を懐古しているのだろう。しかしそのうち、こちらの様子を察してか、邪魔してごめんね、とこれまた何回も言いながら離れていった。終始にこにこして、礼儀をわきまえている。小男の後姿を眼で追いながら、むしろ、風体で人間を判断している自分を恥じた。

さてと、少し動いてみようか。いくらベストポジションとはいえ、ほかの構図も探すべきだろう。だいいち、前回来た時には、海の中に浮かぶ防波堤を横から撮っている。あの位置取りはどこだったのか、と思いながら日陰を出た。少し右に行くと、木立が切れて、こじんまりした駐車スペースになっている。車が二、三台止まっていて、なにやら、猫が、いっぱいいるぞ。

そういえば、さっきの日陰でも、ニャンコが毛づくろいをしていた。耳がV字カットされていないから、野良猫たちだな。釣り人達が、エサをあげているのだろうか、いや、そういえば、さっき、猫エサを茂みに撒いていたおじさんがいた。おいでおいでしてみたが、野良猫たちはシカとして、寄ってこない。とはいえ、人間とは、なんとも不思議な距離感を保っている。

さらに奥にも、駐車スペースがあるようだが、ここからはよく見えない。砂浜に続くタイルの段々はここで終わり、海沿いに柵のついた遊歩道が続いている。両脇草ぼうぼうの入り口には、自転車止めのような鉄柵がある。その前に、なぜか、おおきなコンクリの直方体が二つ、すこし間をあけて置いてある。あとで思ったことだが、あれはきっと、砂浜への車の侵入を阻止する障害物だったのだろう。

波際では、若い釣り人が二人、大きな声で騒いでいた。〈シマアジ〉が釣れたようで、釣り上げた方も、その友達も、興奮している。駐車スペースには、スポーツタイプの青い車が置いてあり、初心者マークが、前後に一枚ずつ、律儀に張ってある。もう一台、スポーツタイプのモスグリーンっぽい軽自動車が止まっていて、こちらは、フロントガラスなどに、純正の？日除けシェ

ードをきっちり張っている。まだ新車のようにだ。

炎天下、しかも、腰かける所もないので、大きな直方体のコンクリに寄りかかりながら、灯台と富士を撮っていた。案の定、構図的には、灯台が、さらに左側に移動して、小さくなり、バランスが悪い。と、すぐ横を、やや仏頂面した、釣り竿を手にした若い男が通り過ぎていった。ちらっと見ると、全身黒づくめの釣り人仕様だ。そういえば、ちょっと前にも、どこからともなくあらわれて、波際の方へ行った奴だ。さらに横目で見ていると、モスグリーンの軽に乗り込み、駐車スペースで回転して、行ってしまった。不機嫌そうな若者の表情が印象に残った。カネは持っているのだろうが、奴も、波際でシマアジを釣って興奮している二人組をみて、友達が欲しいと思ったのではないだろうか、ちらっと思った。

たしか、まだ二時過ぎだったと思う。さらに右方向へ移動して、違った角度から、富士と灯台を撮れないこともない。ただし、それには、炎天下の中、また砂浜を歩かねばならない。あるいは遊歩道を歩きながら撮るという手もある。だが、どちらも、思った瞬間に却下した。暑すぎるのだ。

となれば、構図的にはよろしくないが、海岸縁を左方向へ移動

しょう。駐車スペースの背後には木々が生い茂っていて、多少日陰になっている。その日陰づたいに歩こう。途中、車に寄って、ペットボトルの水で給水した。ところが、左方向も、じきに駐車スペースが切れてしまい、そのあとは、炎天下、海岸沿いの広めの遊歩道を歩くことになってしまった。まいった。とはいえ、ここまで来た以上、左端までは行こう。

遊歩道が大きく左カーブするところに、狭い砂浜があり、波打ち際に波消しブロックが敷き詰められていた。その先端に、背丈ほどのrocketのような物体が立っている。灯台の役目をしている、いわば<灯台ロボット>だ。やや斜めになった、ブロックの上を歩いて近づき、スナップした。来た、という記念だ。とはいえ、登山靴を履いてこなかったもので、足元が危うい。滑りそうになってしまった。くわばら、くわばら。

ところで、この場所、すなわち<真崎海岸>の左端では、もはや、富士と灯台を一つ画面におさめることはできない。いや、むろん、広角で撮れば一緒に写るが、<富士と灯台>という写真的な主題からは外れしまう。

そのかわり、まったくの予想外だが、ここは、海の中に浮かぶ赤灯台(清水港外防波堤南灯台)と富士山が、綺麗に一つ画

面におさまる場所だった。この赤灯台は、いままで撮っていた白灯台(清水港三保防波堤北灯台)のペア灯台で、清水港に入るフェリーが、この間を通って行くようだ。写真的には、富士が右上にあり、小さいながらも、左下の赤灯台が対岸の緑の山を背景にして、海の中にちょこんと立っている。色彩的にもきれいだし、点景以上の存在感がある。このささやかな発見で、やや元気が回復した。

おりしも、太陽が西に傾き始めていた。まだ十分に明るかったが、そのうちには、西日が富士山を染めるだろう、という期待は、どうやら裏切られそうだ。というのも、依然として、ぶ厚い雲が富士山の八合目までかかっていたし、その勢いが、西の空にも及んでいる。それに、陽が沈む方向と、富士山が離れすぎている。これでは、西日が、うまく富士山に反射しないのではないか。

右手をみた。海の中に白灯台が小さく見えた。多少、西日を受けているような気もするが、全体的な雰囲気は、なんだか、黒っぽい。茜色に染まる富士山と白灯台。これは、まあ、今回は無理だろうな。対岸の備蓄タンクやキリン(コンテナクレーン)をスナップしながら、ぶらぶら、車に戻った。

#4 一日目 2022-9-25(日)

清水港三保防波堤北灯台撮影 3

真崎海岸車中泊

久しぶりの写真撮影、それに、予想外の暑さ。多少、熱中症気味だったのかもしれない。運転席に座って、このあとの予定を考えていた。エアコンの風が冷たくて気持ちよかった。時間的には、まだ15時過ぎだ。とりあえずは、ここから一番近いコンビニへ行って、排便しよう。腹が張っていて、やや不快だったのだ。ところがだ、前にも書いたが、このコンビニのトイレも、断水のために使えなかった。台風の影響だ。ま、それは致し方ないとして、食料を調達した。だが、ロクな弁当がない。あとは、飲み物と、明日の朝食用の菓子パンとおにぎりを買った。

すぐに海岸縁の駐車場に戻った。日陰に車を止め、後部座席の車中泊スペースに入り込んだ。ちょっと考えて、夕食の弁当を、いま食べることにした。これは、前回の車中泊の経験からくるもので、寝る直前に食事をすると、排尿の量と回数が多くて、煩わしい。それに、車中泊の場合、陽が落ちたら、ま、寝るしかないのだ。日没が17時半過ぎだから、おそらくは、19時には

寝ているだろう。だとするならば、いま夕食を済ませておくのは、妥当なことだ。

どうせまずいのだからと、一番安い弁当を買ってきたものの、腹が減っていたのだろうか、意外にうまかった。そのあと、食休みで、ごろっと横になった。周りが静かだったこともあり、うとうとしてしまった。気づくと、すでに16時過ぎになっていた。さてと、夕方の撮影だ。

外に出ると、左端の方に、すでに陽が落ちかけていて、辺りは少し薄暗くなっていた。荘厳な夕暮れなどではない。富士山も白灯台も、茜色には染まらず、ただただ黒っぽい。これでは写真にならない。とはいえ、せめて、白灯台の目が光るところくらいは、撮ろうと思った。秋の日は釣瓶落とし、なのか？たらたらしているうちに、あっという間に暗くなってきた。対岸のコンテナ基地の照明が、しだいに光を増し、なにか、煌々とした感じだ。いっぽう、富士山と白灯台は、さらに黒くなり、ほとんど存在感がなくなった。

まわりの雰囲気としたところで、夕焼けの優しい色合いに横溢している、というわけでもない。この時点で、ほぼ、写真はあきらめた。それでも、未練がましく<ISO>の数値を少しいじった

りして、夜間撮影、というか夜間スナップを試みた。だが、富士山と灯台以外に、いったいなにを撮ろうというのだ。と、白灯台の目が緑色になった。少し本気を出して撮ったが、すでに腰が引けている。記念写真にしかならなかった。

期待していた、富士山と灯台の荘厳な夕暮れは、次回、季節をかえて、再度挑戦するしかないだろう。いや、夕陽と富士山との布置関係からして、この位置取りでは、いつ来ても<ゴールデンタイム>は訪れないのかもしれない。まだ、18時過ぎだったのだが、すでに完全に夜になっていた。今一度、目を凝らして、白灯台を見た。灯台からの光線は見えない。おそらく、目は海の方へ向いているのだろう。深くは考えなかった。いや、考えたくなかった。灯台からの光線を撮ることは、かなり以前から諦めている。なに？ 難しいんだよ。俺の腕では無理なのだ。

車に戻った。横のドアから車中泊スペースにすべりこんだ。まだ眠くはないが、寝る用意をした。荷物を脇に押し付け、持ち込んだ羽毛の掛布団を二枚重ねて広げた。これなら、寒さ暑さの加減で、一枚掛けにも、二枚掛けにもできる。その上に胡坐をかいて座った。ノートパソコンから音楽を流し、小腹が空いたので、朝食用の菓子パンを食べた。そのあと、少しメモ書き

したような気がする。

二代目ベゼルでの車中泊について、一代目との差異をすこし記述しておこう。後部座席を倒してフラットにした空間の広さは、左右のでっぱりが少し凹んだぶん、若干広くなったような気がする。もっとも、これは気のせいかもしれない。というのは、前回の車中泊経験に基づき、荷物の量を減らしているのであり、空間カスタマイズも、無駄がなくなったからだ。

あと、これが一番重要なことだが、床面の段差がほとんどなくなり、ほぼ平らになったことだ。このことにより、床面には敷布団を一枚敷くだけでよくなった。一代目の時は、段差を埋めるために、マットレスと敷布団を二枚重ねにしていた。この段差の解消は僥倖だった。というのも、二代目は、あきらかに、一代目より天井が低いので、床面に布団類を二枚敷くと、頭が天井についてしまう。これは予行演習で判明したことで、その時は、どうしていいのかわからず、やや狼狽した。

あとは、敷布団一枚だけの寝心地はどうか、という問題が残る。この点に関しては、今回、実地で経験できなかった。暑かったので、掛布団の上でほぼ寝ていたからだ。もっとも、これも予行演習はしている。敷布団一枚でも、ま、寝られないこともない。

だが、実際に試さなかったことを、少し悔いている。結論として、二代目ベゼルの、車中泊スペースの居住性は、一代目より向上している、といっておこう。

メモを書いている最中に、バックドアの目隠しにしてある、百均で買った日除けシェードが、再三、ぱらりとはずれる。吸盤がうまく機能しないらしく、何度も、すこし場所を変えてくっつけてみたが、すべて、ダメだった。しまいには、ややイラついたが、これは今後の課題として受け止めよう。

外の様子を、窓越しに窺がった。少し離れたところに、海に向かって、何台か止まっている。左手側の車は、補助灯がついていて、エンジン音が微かに聞こえる。公然と車中泊ができる、高速のパーキングとか道の駅以外の、いわば、トレイもない、街灯もついていない公共の駐車場で、車中泊をするのは初めてだ。う〜ん、危険な目に遇うかもしれない。トラブルに巻き込まれるかもしれない。やや、疑心暗鬼になった。

とはいえ、もう〜どうしようもないではないか。近くに道の駅はないし、ここで、日の出まで待機するしかないのだ。何かあったら、その時はその時だ。と、やや開き直ったら、不安が少し解消した。そのあと、歯磨きくらいはしたのだろうか、うとうとしだした。

一時間おきくらいに、目がさめ、おしっこ缶に用を足した。ついでに、外の様子を窺がうと、今さっきいた車がいなくなり、別の場所に、別の車が止まっていたりした。カーセックスを楽しんでいるのかな、などと下卑た言葉が、自然と出てきて、にやにやしている自分を感じた。

そのうち、何かの音で目がさめた。雨が降っているようで、すこしドアを開けて確かめた。かなり強く降っている。夜中も晴れマークがついていたので意外だった。それと、外が、変なふうに明るい。あれ〜っと思って、ドアを少し開けて、首を伸ばすと、対岸のコンテナ基地の照明が、前にもまして、煌々と光っていた。本来ならば、街灯のない駐車場なのだから、真っ暗なはずだ。それが、コンテナ基地のおかげで、怖くはない程度に明るくなっている。これには、勇気づけられた。

ところで、先ほどから、腹の調子がよくない。便意を催しているわけだが、近くにトイレはない。だが、ずうっと我慢していたので、もう限界だった。少し悩んだすえに、ティッシュペーパーを何枚か手にして、外に出た。付近に車は止まっていない。茂みの中に駆け込み、一瞬ためらったが、世界に尻をあらわにして、用を足した。人生で初めての〈野糞〉だった。

あ～～、スッキリした。いつしか雨はやんでいて、見上げると満天の星だ。先ほどの通り雨で塵が洗い落とされたのだろう、空気が澄んでいる。一つ一つの光の粒が大きい。キラキラしている。月並みだが、大粒のダイヤモンドがちりばめられているようだ。こんな星空を見たのは、久しぶりだった。危険を冒して、世界に出てきた甲斐があったというものだ。

<野糞>と<星空>。<実存>とは、まさに、こうしたものなのだろう。真夜中に、楽しい気分になった。

#5 二日目 2022-9-25(日)

清水港三保防波堤北灯台撮影 4

午前四時半に起き上がった。念のために目覚ましをセットしていたが、その必要はなかった。すでに、夜中の三時半頃には、半ば目覚めていたのだ。とはいえ、ほとんど寝ていない、というわけでもない。一時間おきのおしっこタイムで、否応なしに起こされてはいたが、これは、自宅でも同じだ。初体験の公共駐車場での車中泊だったが、午前零時過ぎに、矢でも鉄砲でも持

ってこい、と開き直ってからは、不安がすこし解消されて、多少は寝られのだ。寝不足感はなかった。

いちおう、車内で朝の洗面を済ませた、のかな？はっきり覚えていないが、シェーバーで髭剃り、歯磨き、すすぎ水はビニール袋(スーパーで無料でゲットできる薄いのを二重にしたもの)に吐き出し、ゴミ袋へ入れた。ちなみに、この方法は、テレビで見たのだ。訳あって、アイドルの女の子が車中泊生活をしている時のひとコマだ。そのあと、ウェットティッシュで、顔をふいたかもしれない。あ、それから着替えだな。そんなこんなで、三十分経過したのだろうか？五時すぎには外に出た。

まだ真っ暗だった。だが、波打ち際には、釣り人がかなりいる。活気がある。ヘッドライトをつけて、動き回っている奴もいる。駐車場を見回すと、いつの間にか、車も増えていた。元気な奴らだ、と思いながらスナップした。いっぽう、本題の富士山と灯台だが、こちらは、ただただ黒ずんでいるだけで、写真にならない。雲が多すぎるのだ。

そのうち、右端の水平線の辺りが、うっすらオレンジ色に染まり始めた。なるほどな、朝日が富士山と離れすぎている。この布置関係では、朝日に染まる富士山は幻想だ。見ることも、撮る

こともできないだろう。それに、くどいようだが、雲が多すぎる。

富士山と灯台の写真はあきらめたものの、早朝の海景は撮るつもりでいた。朝日が、水平線からすこしずつ上がってくる光景は、いつ、どこで見ても、神々しいものだ。富士や灯台に、やや背を向けた感じで、その時を待っていた。幸いにも、水平線と黒雲に覆われた空との境界には、多少の隙間がある。そのあたりだけが、濃いオレンジ色に染め上げられている。

目を細めて、日の出の方向を確認しようとした。すると、朝日は、右手から張り出している岬の上に、出てくるような感じだ。ま、水平線がベストだけど、シルエットになっている岬の上からでもいい。朝日を拝めるだけでも僥倖なのだから、ぜいたくを言っ
てはいかん。と、なんということだ、車の中にサングラスを忘れてきた。出てきた時は真っ暗だったから、それに、寝起きで頭がまだ働いていなかったのだ。今更後悔しても遅い。今まさに、岬の上に、朝日の頭が？がちょこんと見え始めた。なるべく、朝日を直視しないようにして、目に悪いからね、ここぞとばかり、シャッターを切り始めた。

いったん、顔を出し始めたら、そのあとは早い。朝日は、あつという間に真ん丸になり、垂れこめている巨大な黒雲の中に吸

い込まれていった。とはいえ、何枚かは、朝日をちゃんと画面に収められた。濃いオレンジ色の中に、やや黄色味を帯びた、まん丸い、ふくよかなお餅のような朝日だった。

そのあとは、黒雲の下から、海に向かって、浅黄色の光芒が幾筋も現れた。むろんこれも写真におさめた。おりしも、漁船が一艘、左手から現れて、まだ暗い朝の海を横切って行った。なんというか、これには抒情を感じてしまった。

ところで、富士山と灯台は、どうなっていたのだろうか。結局、朝日との距離がありすぎるので、一つ画面に収められないばかりか、朝日が反射して、オレンジ色に染まるということもなかったようだ。正確に言うと、富士山は、黒い雲に覆われて見えなかったし、灯台は、その右側面が、ほんのわずか紫色っぽくたっただけで、全体的には黒くて、魅力がなかった。空の大部分が分厚い雲に覆われているのだから、これは、致し方ないことだろう。

なんとなく、あたりが白んできた。釣り人達の姿も、対岸のコンテナ基地も、はっきり見えてきた。あ～あ、完全な曇り空だ。日差しがないのだから、写真は、もう無理だ。すごすごと車に引き返した。カメラを車の中に置き、カセットコンロなどをひとまとめ

にしてある、黄緑色のトートバックを取り出した。あとは、折り畳み出来る木製の小さなテーブルと、ちっちゃな腰掛椅子だ。外で、お湯を沸かして、カップラーメンを作って食べようというわけだ。ついでにインスタントのコーヒーも作ろう。

前回の灯台旅で、カセットコンロを使って、野外で湯を沸かすのは経験済みだった。さほどめんどうなことはない。アルミ箔の風除けを、コンロの周りに立てかけ、なおかつ、炎が風で飛ばないように、車の陰に隠れるようにして湯を沸かした。と、右隣から男女の話し声が聞こえてきた。〈なにわ〉ナンバーの白い SUV が、少し離れた右側に止まっていたのを、先ほど戻って来た時に確認している。

結婚前のカップルで、時々車中泊もしながら、旅行をしているのだろう。男が、なにか、女のしでかしたことを、やんわり、とがめている。男女ともに、大きな声の関西弁なので、そういうふうに聞こえたのかもしれない。車から荷物を外に出して、二人で整理しているようだ。そのあとも、男女の大きな話し声は続いていたが、こちらは、カップ麺を作っているのだし、そのあとは、朝食だ。ほとんど意に介さなかった。

ラーメンを食べ終え、車に寄りかかりながら、マグカップでコー

ヒーを飲んだ。ちらっと見ると、男女が車体に腰かけながら、歯磨きをしていた。白い T シャツの女は、こちらのことが気になるらしく、ちらちら見ていたような感じだった。豊満な体つきで、東南アジア系だったかもしれない。いや、ちゃんとした？ 関西弁を話していたから、日本人だろう。

そのうち、男が、段々の下の茂みに行って、ペットボトルの水で、口をすすいでいた。女もそのあとに従い、すすいだ水を、茂みに吐き出していた。いい車に乗っているのだし、二人とも、身なりも、それなりにちゃんとしていたので、その行為に、やや違和感を覚えた。むろん、昨晚、夜陰に紛れ、茂みで〈野糞〉を垂れた爺に、とやかく言う資格はない。反省すべきは、まずもって、自分であろう。

食後の始末をして、コンロなどを車の中に戻した。さてと、曇り空であることだし、少し昼寝でもして、そのあと、ゆっくり帰ることにしよう。車中泊スペースに滑り込んだ。バックドアに、日除けシェードをくっつけたが、吸盤がへたっているのか、窓ガラスが多少歪曲しているのか、すぐに落ちてきてしまう。さほど眩しくもないので、まあいいや、そのままにして、目をつぶった。外界の音が、その中には例の男女の関西弁や、すぐ左隣に駐車

してきた、爺婆の話し声などもあったが、しだいしだいに遠のいていった。

多少寝たのだろうか、外は陽が差していて、いい天気になっていた。あれ〜と思いながら、カメラを二台手にして、急いで外に出た。まず気になったのは、富士山だ。惜しいかな、昨日より悪い！九合目近くまで雲がかかっている。日差しが十分あるだけに、残念だった。一方、灯台の方は、近くに停泊していたコンテナ船が移動して、スッキリした。それだけに、なお一層、富士山にかかる雲が恨めしかった。

それでも、気合を入れて、何枚も撮った。〈灯台のある風景〉あるいは〈海景〉としては、さすがすぎて、十分写真になると思ったからだ。いちおう撮り終えて、その場に立ち尽くした。このあと、富士山にかかる雲が、風に流されることはないのかと、向かって左手、西の方角を凝視した。太い雲の帯が、わずかに右方向へ動いてはいる。とはいえ、それは途方もなく長く切れ目がない。ここ数時間の間に、目の前の光景が変化するとは到底思えなかった。

今一度、雲の上に突き出ている、富士山の頂上付近を眺めた。二十年ほど前に、あそこまで登ったことがある。七合目辺りで、

高山病にかかり、比喩でなく、それこそ、死ぬ思いをした。だが、九合目あたりから、気分がよくなって、頂上に着いた時には完全に治っていた。あれは、夢だったのか、奇跡だったのか、今もって、謎だ。とはいうものの、自分の生涯で、ひとに、銜いなく、自慢できることがあるとすれば、あの時の富士登山以外には考えられない。

＜あたまを雲の上に出し 四方の山を見下ろして かみなりさまを下に聞く 富士は日本一の山＞。この短い旅の間、何回となく、耳の奥で、いや頭の中で、この歌の、はじめとおわりの歌詞が聞こえていた。いい場所を見つけたものだ。また来よう、とこれは本気で思ったことだし、おそらく近いうちに、また来るだろう。踵を返した。いつの間にか、白いSUVの＜なにお＞ナンバーは、いなくなっていた。

2022-10-9 脱稿。

